

「広島に原爆を落とす日」のあらすじ

1945年、白系ロシア人の混血であるが故に、海軍作戦参謀本部から南海の孤島に追いやられた男、ディープ山崎少佐は、日本が戦勝国となった時、敗戦国の子どもらに与える納豆を作り続けている。しかし、彼は来るべきデモクラシー、そして愛する女、夏枝への思いを断ち切れずに鬱々として日々楽しまない。一方、夏枝は、大本営敗戦処理班の密命を受け、アメリカの原爆投下地点をドイツにすべく、単身ベルリンで工作中であった。ナチス総統、アドルフ・ヒトラーは、何人にも感じたことのない愛しさをこの女に感じ、この無垢なる女と山崎の逢瀬のために、自身はドイツ第三帝国と共に滅びの道を選ぶ。

しかし、悪魔の光を放つという、呪われた原爆の投下ボタンを押せる人間が、果たしてこの世界に存在するのであろうか。正気の間人ならば、ボタン一つで数十万人もの人間を殺戮できるはずはないのだ。

1945年、アメリカは焦っていた。人類初の原爆投下国としての汚辱からまぬがれるべく、コンピューターがはじき出した、原爆搭載機・B29エノラゲイの乗務員の名は、日本海軍102師団ディープ山崎少佐、その人であった。

水島 私は広島平和教育研究所の藤川伸治さんから送られてきた感想文の山をみたときに、とても驚いた。一五〇〇人の観客のうち三分の一が、帰らずに残って感想文を書いていたという。これはすごいことです。感想文を読むと、高校生言葉で「めっちゃ×2おもしろかった。原爆のこと、もっとちゃんと勉強すればよかった」といったことがびっしり書いてある。ここまで若い人を感動させる力はなんなのか。そう思っ「広島に原爆を落とす日」のビデオをみると、ディテール(細部)はむしろよくちゃんなんです(笑)。「ヒトラーがこんなこと言うわけがない」から「少佐の階級章がおかし」まで、たくさん齟齬がある。にもかかわらず、芝居の迫力

に引き込まれていった。「私の愛をとるのか、それとも広島に原爆を落とすのか」なんて、そもそも「選択」として成立しません。そういう「選択」をあえて設定するところがとても挑発的で、この芝居の強いメッセージ性だと思いました。面白くなければ人は来ないし、どうせつくならもつともらしいウソよりも大ウソのほうがいい。これは、一歩間違えばヒトラーの言ったことと同じで非常に危険なのですが、私自身も広島大学で六年間、「ヒロシマをどう伝えるか」に苦勞してきましたから、正直「これは負けた」と思った。「この芝居をみてから平和資料館に行きます」……そういう若者の感想文がたくさんあるのを見て、とくにそう思いましたね。

岡村 広島公演をめぐっては賛否両論あって、「最終的に広島はこんな芝居は受け入れられない」と思ってた方もたくさんいたと思います。でも広島の中にも、「こういう芝居が理解できないければ、平和教育もダメなんじゃないか」とおっしゃってくれた方もいました。

水島 稲垣吾郎を主役にしたことも大きいと思います。若者に金を払って来てもらおうと思ったら、そういう「不純な動機」から入ることも必要で、その上で、稲垣吾郎がとてもシリアスな芝居をやったのけた。この作品の成功は、広島で平和教育にたずさわっている人々にとっても、新しいヒントやチャンネルを与えてくれたと思います。

●恐怖を植えつけるだけでは
岡村さんは高校まで広島にいて、従来の平和教育を受けてい

●特集—ヒロシマ・ナガサキ 「空洞化」をどう超えるか

「伝え方」を考える

「広島に原爆を落とす日」をめぐって



水島朝穂

みずしま・あきほ

1953年生まれ。早稲田大学法学部教授。専攻は憲法学。広島大学助教授などを経て現職。著書「武力なき平和」(岩波書店)『ヒロシマと憲法』(編著、法律文化社)、など。98年8月、広島でのシンポジウム「ヒロシマを語る」に、岡村氏とともにパネリストとして出席(中国新聞98年8月28日付)。



岡村俊一

おかむら・しゅんいち

1962年、広島県生まれ。演劇プロデューサー、演出家。96年、「スーパースキャンダル」で劇場映画デビュー。98年、つかこうへい作の芝居「広島に原爆を落とす日」(主演・稲垣吾郎、緒川たまき)の広島公演をプロデュースし、話題を呼んだ。

対談

●「めっちゃ×2おもしろかった」
被爆から半世紀以上がたつて、実際に体験をもつ人たちの数が減り、伝え方自体もある種のパターン化が避けられなくなるなど、「ヒロシマを伝える」ということ自体が難しくなってきたと思います。そんななかで、岡村さんは九八年に「広島に原爆を落とす日」(つかこうへい作)を広島で上演されました。

岡村 私自身、広島出身の被爆二世だということもあって、何かそういった芝居ができないかと考えたのが最初です。九七年に東京で上演したところ、それが広島テレビ局に取り上げられ、広島でもできないかという話になりました。ところが、広島市の文化振興課などに話を持っていくと、婉曲にけんもほろろだった(笑)。「市民感情がありますので、こういうものは……」と言うんですね。興行ですから本来は金儲けが目的なのですが、広島公演の場合は意味合いが少し違う。広島でやること自体にシンボリックな意味があるので、とにかくやろうと心に決めた。

この芝居自体は明らかにフィクションなのに、なぜ問題なのか。むしろ、原爆を語ること自体のタブー性のほうが問題ではないのか。どこからも文句がつかないようにつくったお話のほうが、ウソではないのか。そういったタブー性や自縛に、きちんと向き合って、それをはずしていきかけた。

実際にやってみるといろんな反響がありました。それをねらってやったと言うとウソになりますが、こういう芝居に需要があったんだなと思いましたね。

らっしゃった。いま振り返っていかがですか。

岡村 授業のなかでも平和教育があるのですが、受験生時代はどうしてもそれが「余計な事」に思えてしまう。「これ、受験に出るの？」みたいな。そういう距離感がありましたね。

それから、あるとき、会社の同僚に「カニが食べられない」という人がいて、『はだしのゲン』で、カニが死体を食べる場面をみてからダメなんだ」と言う。変わったヤツだなと思ったら、また別の場所で、ある俳優に同じことを言われた(苦笑)。私は、「はだしのゲン」はとてつもないマンガだと思いますが、細部の描写だけが伝わって、スピリッツ(精神)が伝わっていない。そういう事態が起きていることを知って、危機感をおぼえたことがあります。カニが食べられないくなるような人たちは、学校の上映会か何かで、「はだしのゲン」を無理矢理みせられて、細部だけが印象に残ってしまったのかも知れない。そうじゃなく、自分自身が好んでみるような方法論があってもいいのではないかと思いました。

水島 戦争を伝えるという場合、ディテールはくせものです。心が伝わらなければイメージだけが先行することになる。いまはホラー映画など怖いものがたくさんありますから、ケロイドの写真を見たからといって、それで子どもたちが「原爆は悪い」と考えるほど単純ではありません。年少の児童はまず「怖い」と感じるし、「オバケみたい」と口に出すのも自然な反応です。でも平和教育のなかでは、そんなことは言っではいけないと先生が言うから、気持ちを整理でき

ない子どもたちも生まれる。

だから、平和教育はもつと柔軟で、相手の年齢や実情に合わせたものでなければならぬと思うのです。おじいちゃんが死んで、体が冷たくなって、夏なんか遺体から死臭がするというような体験もない、核家族化で育った子どもたちに、「カニが死体を食べる」とか「死体に蛆がわく」といった場面を見せても、気持ち悪いだけで、「愛しい人がこんな姿になっちゃった」とは思いません。人間がむごたらしく殺されることの非合理性を、怒りをもって考えられるのは、それなりの段取りが必要だと思う。押しつけ的なショック療法や、そこから導かれる結論が子どもたちにはじめからわかっちゃまっているような教え方では、うまくいかないと思います。

●「広島に原爆を落とす日」と「パール・ハーバー」
——「広島に原爆を落とす日」を、岡村さんご自身は「反核劇」ではなく、「考核劇」と呼んでいらっしやいますね。

岡村 大事なポイントは、「誰のために教育するのか」だと思います。原爆に反感をもつ人を増やして、アメリカに対して日本がものを言うようにする、そのために原爆を教えるのか、それとも個人の被爆体験を、譲れない一線としてキープするために教えるのか。その点がまちまちなのに、いまはまとめて「平和教育」と呼んでいると思います。

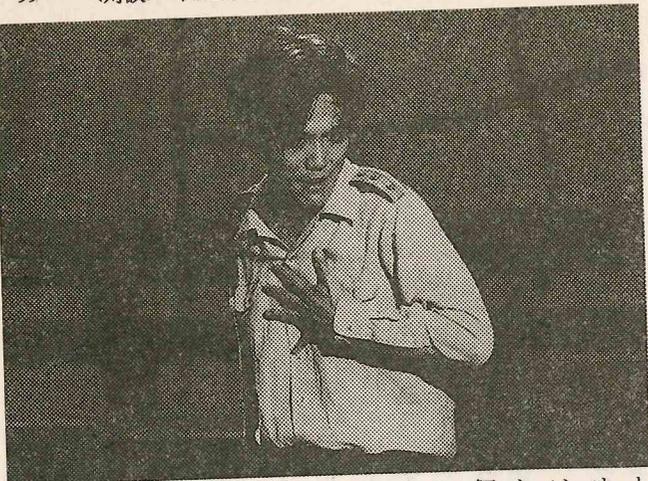
つか(こうへい)さんの視点は、つかさんが韓国籍でいらっしやることでもあるのでしようが、客観的な視点なんですね。「パール・ハーバー」の落とし前をつけるために、原爆一

よ」ということをいちばん伝えたかったんだと思います。

水島 ラブストーリーを全体状況のなかで描く作品という意味では、「広島に原爆を落とす日」と「パール・ハーバー」は似ています。「パール・ハーバー」もディテールは無茶苦茶で(笑)。「パール・ハーバー」では、冗漫な「愛の物語」と莫大な金をかけた戦闘シーンがぶちまけられている。愛の成就と、B25爆撃機で日本を初空襲して溜飲を下げることでがまったくながっていない。ところが「広島に原爆を落とす日」の場合は、「私は、誇りを持って広島に原爆を投下するのであります。誇りを持って四十万広島市民を虐殺するのであります。私は最も愛するもの、私が生をうけて見出した無垢なるものの命、何者にも代えがたいあなたと引き換えにして広島に原爆を投下するのですから」と、愛と原爆投下が二者択一になっている。

「日系二世が、カリフォルニアの収容所にいる両親のために原爆投下のボタンを押す」という設定なら、もつとわかりやすいのでしようが、あえて「白系ロシア人」という設定にしたことで、つかさんは国家とは無関係な純粋個人の愛に還元しつつしたのだと思います。国家をまったく背負わない形でヒロシマを描くことは、逆に「どうしてこういうふううのひとびとを殺したのか」という強い怒りとなってかえってくる。

岡村さんは「考核劇」とおっしゃいますが、こういう形で挑発された若者は、大きく動揺すると思います。つかさんは「男と女が激しくお互いを想い合わなかったら、やがて地球



個落として実験させてくれよ。本当はドイツに落とすのがスジだけど、あいつらは白人だからさ」、そんなやりとりがあったと仮定する。荒唐無稽だと思っけれど、「なきにしもあらずだな」と感じさせるものがある。当時、日本国民はどういう場所にいたのか、誰の考えで動かされていたのか、寓話に置き換えてならそういうことを考えてもよいのではないか。これがつかさんの、視点だと思います。そうすることに

よって、「原爆のせいでウチの家族はこんな目にあったんじゃ」という個人論と、政治的な思考をもった全体論のどちらかの枠で考えていたものを、枠をはずして観客に突きつける。それが、さつき水島先生がおっしゃった「ありえない選択」で、つかさんはそれを通じて、「もう知らんぷりはやめよう

は滅びますよ。人を大切に想う気持ちがなかったら、それこそ簡単に原爆のボタンを押せるようになる」とおっしゃっている。これはとてもシンプルな投げかけ方で、おそらく若者の心には響くのではないのでしょうか。

●「ゴジラ」のリアリティ

岡村 私には自分のやっていることを、運動体としてとらえられたくないという気持ちがあります。あくまでも商品なんです。たとえば、「ミス・サイゴン」はアメリカの出し物であって、日本向けの商品ではない。日本には日本向けの商品があつてしかるべきではないか。「パール・ハーバー」も、ハワイ向けの商品としては必要なものではないか。それはけつして全世界に通じる論法ではない。

「広島に原爆を落とす日」も、日本で需要のある商品なのであつて、これをハワイで上演して、同じように受け入れられるというものではないと思います。

水島 その点、一九五四年一月に封切られた「ゴジラ」第一作は普遍的メッセージを含んでいます。一九五五年には、この第一作をベースに、これに米国の俳優テリー・モースの話をうまく組み込んだ海外版「ゴジラ」(King of the Monsters)がつくられ、輸出されました。「ゴジラ」第一作は非常に活きた反戦・反核映画です。東京湾に現れたゴジラが、口から放射能を吐いて下町を火の海にする。ゴジラに追い詰められた母親が子どもを抱きかかえて、「お父さまのところへ行くのよ」と言い聞かせる。「お父さま」はず

核がひょんなことで使われてしまうかという指摘もあった。米ソ核大国が対峙した冷戦時代とは違った意味で、核の問題が新しいリアリティをもって若者の心を捉えたのかもしれない。この作品は、新しい切り口で、ヒロシマを考えさせたのです。岡村さんと一緒に議論した九八年のシンポジウムするとき、「こんな芝居はけしからん」と言っていたある被爆体験者の方が、別れ際に「孫がこの芝居を見ましてね。『おじいちゃん、あれ良かったよ』って言われて……。孫に『おじいちゃん、あれ良かったよ』って言われて……。非常に印象的でした。」と、にっこり笑っておっしゃった。

●集団としてではなく

「親から子へ」「祖父母から孫へ」というのは、かえって伝えるのが難しいのかもしれない。

水島 「語り部」という形で、戦争体験を本人が語るといふのは、やはり酷なことだと思います。何度もしゃべっているうちに嫌な部分は忘れて、「脚色されたストーリー」になってしまふこともある。被爆者は「アツ」と言ったときには被爆しているわけですから、「そのとき青い空に爆撃機が」というと、どうしても「お話」になってしまいます。その意味で、本人が語るのにはどうしても限界がある。別の人間が大状況を乾いた形で説明する、そういうフォロワーの仕組みが必要だと思います。「語り部に体験だけ語らせておけばいい」という平和教育は、限界にきているのではないのでしょうか。それから、つかさんはあえて「原爆を落とす」という他動

でに戦死していることがわかる。ゴジラは口から放射能を吐きながら、その母子を殺すわけです。すごく怖い。言ってみれば「ゴジラ」第一作は、東京に原爆を落とす日」なのです。戦後九年、「原水爆映画」とうたったポスターに、「こんな映画をつくるんだ！」と非難ごうごう。いまみると反戦映画のゴジラも、「広島に原爆を落とす日」と同じような叩かれ方をします。ところが映画が封切られるやいなや、映画館はいっぱいになったわけです。大ヒットです。

第一作では、太平洋上の漁船がゴジラの放射能を浴びて、船員たちが死ぬシーンがある。実は封切られた年の三月に第五福竜丸が被爆して、久保山愛吉さんが亡くなっているのです。東宝は「ゴジラ」という商品をつくるのですが、つくったスタッフやキャストが生々しい戦争体験をもっているために、それが自然に作品に現れて、私たちの心を打つ。その点、一九九八年に封切られたアメリカ製「ゴジラ」は、巨大イグアナみたいのが走り回るだけ。しかも核兵器の化身がニューヨークを走り回ったのに、誰も放射能の測定すらしようしない(笑)。CGを駆使した「パール・ハーバー」よりも、飛行機を吊っているピアノ線が見える「ゴジラ」第一作のほうが、はるかにリアリティがあります(笑)。

では、「広島に原爆を落とす日」のリアリティはどこにあるのか。実は九八年の広島公演の直前、インドとパキスタンの核実験が強行されました。「ゴジラ」第一作封切りに第五福竜丸事件が起きたのと似ています。参加者の感想も、詞を使いましたが、日本人は戦争を語るべきとき、いつも受け身だった。「空襲された」「原爆を落とされた」と。その結果、加害体験と被害体験とが、非常に不幸な対立をしています。一方で、軍部・広島から第五師団が出て行ってアジアを侵略した。「被爆体験ばかり言っている」というアジアからの声に、被爆者が急に加害のことも語りはじめたのですが、それは不幸なことだと思います。非戦闘員の無差別殺害という戦時国際法違反が、ヒロシマで起きた。その体験は、あくまでもそれに徹して語るべきです。

「広島に原爆を落とす日」というタイトルは、戦争はけつして自然災害ではない、人間が起すものなのだということがはっきりさせています。日本国憲法も「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し」(前文第一段)と書いています。「国民」ではなく、「政府」が戦争を起す主体なのだと明記している。その観点からすれば、原爆投下はアメリカ政府の行為によるものです。

岡村 私の祖父は、父方も母方も二人とも原爆で行方不明になってしまったのですが、みんな死んでしまったために、誰の言っていることが正しいのか、わからないということがあ

るんですね。原爆が、二度と落とす日」とはいけないものだとするならば、「広島に原爆を落とす日」では物語として足りてないと思います。ちょっとヘンな話なのですが、「赤穂浪士」って江戸時代に流行った芝居じゃなくて、「我慢して生きろよ」とい

うことを教えるために、戦後NHKが流行させたとか思えないんですよ(笑)。生きていくための心の支えとして、「流行りもの」が生まれてくるのだとしたら、そして日本国民が核廃絶を本心に願うのなら、そういったファクターの物語を、一つ編み出さなくてはいけないのではないか。

スピルバーグがどうしても「シンドラーのリスト」をつくりたいと考えた気持ち、と同時に、ナチのなかにおいても、集団の論理よりも個人の論理を大事にみようとする冷静さ、そういうものが埋め込まれた物語を、日本人もつくっていかなくてはいけないと思っています。

水島 日本では、政治的な立場にかかわらず、「集団」として美しく描きたがる傾向は確かにありますね。

NATO空爆が始まった九九年三月から一年間ボンに滞在しましたが、空爆が終わった翌週、高級週刊紙(Die Zeit)が、「わが履歴書」というタイトルの顔写真だけのページを作りました。二人のカメラマンが、コソボからマケドニアに逃げてきた難民二万六〇〇〇人の証明書用顔写真を、移動ス写真を二ページの紙面いっぱい載せたものです。「コソボこういふ顔をした、一人ひとりの個性ある人間なのだとこのことを言いたかったでしょう。そうすると、この人たちが救うためという名目で、ベオグラードの市民八五〇人以上を、爆撃で殺したことは正しかったのか、という問いになる。

よ？ 座り込みなんてして、何も変わらないのに」という反応をする。このズレ、異なる二つの論理が共存できるような伝え方をしたいか。そうではないか。そうではないと、「座り込んで変わるっていいじゃないか」と終わってしまう。運動としてはないやり方で、そういうおじいさんを美化していききたいんですね。

●ニュースとドラマ

——「ヒロシマの心が伝わらない」とよく言われますが、では「心」を、どのように伝えたらよいのでしょうか。

水島 水戸黄門が、最後の立ち回りの場面で、助さんと格さんに悪者を斬らせるときがありますよね。何人か斬った後で、「控えおろう」と印籠を出す。だったら、もっと早く出せばいいのに(笑)。ではカメラアングルを変えて、「代官所に出社するお父さん」を朝から追っていったらどうでしょう。奥さんと子どもが、「お父さん、行ってらっしゃい。早く帰ってきてね」と送り出すシーンを撮る。代官所へ行ってみると、悪代官に「いまからご老公を襲いにいくぞ」と言われる。仕方ないからついていくと、助さんに斬られてしまった。こうなると、水戸黄門は極悪非道の悪者で、みんな斬られたお父さんに同情するでしょう。ところが水戸黄門では、斬られた側がいつもみんな悪者。つまり問題は目線なのです。その出来事が残虐かどうかは、一人の人間が死んだ事実を、どう意味づけるかによりいくらでも変わってしまう。

被爆者を集団でとらえるのではなく、一人ひとりの生き

同様に二〇〇〇年六月、広島市の『中国新聞』は、爆心地になった中島本町などの一軒一軒を特定して、個人住宅まで書き込んで、これも見開き二ページの地図上に記し、その裏面に、「そこに住んでいた人たちの小さい顔写真をびっしり載せました。「原爆で何人死んだ」ではない。爆心地に消えたのはこういう顔をした個人なのだ、と。

平和論は本来、個人のところから議論しなくてはいけないのに、これまで「集団」や「運動」に過度に傾斜して議論されてきたのではないか。その一方で、「人権のための戦争」というやっかいな主張も出てきた。

イラクに対する一〇年もの経済封鎖によって、すでに五〇万人以上の罪のない子どもたちが死んでいる。そのうち日本でも、自衛隊を、他国における大規模な人権侵害をやめさせるために使うという議論(「人道的介入」)も出てくるでしょう。しかし、どんな目的であれ、人を殺傷する武力行使は手段として本当に正しいのかが問われなければならない。「愛を貫くために、大勢の人を殺すのは正しいのか」という対置の仕方は、ここで意味を持つてくると思います。

岡村 広島で公演した後で、「若い人が望むなら八月六日にコンサートでも何でもやったらいい。でも、その日はおじいちゃんの命日なのよ」と涙まじりに言った女性がいました。個人論からは、当然そういった反応が出てくるだろうと思います。一方で、どこかの国が核実験をしたときに、年輩の方が抗議の座り込みに行くと、家族が「どうして行くの

た、かけがえのない人間として描けば、原爆投下がどれだけひどいことだったか、よくわかります。戦争の残酷な写真やフィルムを見せたり、悲惨な話を聞かせたりすることだけが平和教育なのではない。人間的共感と豊かな想像力こそ、平和教育の前提でなければなりません。いま、押しつけ的平和教育からの脱却が求められていると思います。

岡村 いまニュースとドラマの判別が、つかなくなってきたかと思えます。小泉内閣を「ワイドショー内閣」と呼ぶのは言い得て妙だと思のですが、ニュースとして伝えるべきことと、ドラマとして美化することが曖昧になってきている。歴史教科書の問題も同じだと思います。事実としての書き残し方と、ドラマとしての理解のさせ方は違う。教科書はドラマではないのです。ドラマの部分は、「これはドラマですよ」とはつきり言わなくてはいいけない。その区別が曖昧になってきていることは、とても危険だと思えます。

ヒロシマで言えば、「戦争があった。日本もこんなに悪いことをした。広島に原爆が落ちた」、これは事実です。そのなかで起きた出来事を、あえて取り上げたり、取り上げなかったり、効果的に使ったり、割愛したりといったことはドラマの部分です。その二つを両方ごっちゃに伝えようとして、中途半端に終わってしまったのではないか。だからこそ、あえて商品に徹したドラマが必要なのだと思います。